

〈第34回学会大会(立教大学)地域研究〉

「都市レジャーの今昔」報告

田中伸彦\*

Urban Leisure in Tokyo from Edo Era to Heisei Era

Nobuhiko Tanaka\*

1. 「地域研究」開催の趣旨

第34回学会大会では、大会初日に「地域研究」を実施しました。

レジャー・レクリエーション学会では、昨年の第33回大会から、「地域研究」を学会大会中の正式な研究活動に位置づけています。つまり、他の多くの学会で行われているような、大会前後のオプションとしての見学会ではないということです。

レジャー・レクリエーション学会は、体育学、福祉学、造園学、社会学など、実に多様な学術的バックボーンを持った研究者が集まる学際的な学会です。そのため、年に一度の大会期間中に、多様な研究分野の人々と、共通のフィールド体験を共有し、ディスカッションを行うことで、学会としての共通認識を深めていこうというねらいで、「地域研究」に取り組んでいます。

2. 「地域研究：都市レジャーの今昔」の概要

4年ぶりに東京（立教大学）で開催された第34回大会では、地域研究のテーマを「都市レジャーの今昔」としました。

首都東京は、江戸時代の幕開けから現在に至るまで、わが国の都市レジャーの中心地として発展してきました。その約400年の歴史の中で、江戸から東京にいたる都市レジャーがどのように変遷したのかを、都心のいくつかのスポットを巡りながら見聞を深めることが今回の地域研究のねらいです。

江戸東京の都市レジャーというと、たとえその分野を専門としていなくても、しばしば見聞きするテーマではないかと思います。そのため、何となく、もう十分知った気になっている人も多いかもしれません。しかし、学会として、江戸東京をはじめとする都市のレジャーを学術的に深く考察する機会は、いままで思ったより少なかったはずです。さらに言えば、「六本木ヒルズ」や「はとバス」など、名前はよく聞くものの、実際に利用した経験がないという学会員も少なくないと思います。

江戸東京のレジャー・レクリエーションの空間、歴史、仕掛けは、予想以上に奥が深いといえます。そのため、実体験や詳しい解説に基づいた考察を、多様な専門性を持つ学会員同士で、ざっくばらんに行うには、江戸東京は非常におもしろい題材です。この様な理由から、第34回大会では、江戸東京の都市レジャーを真正面から採り上げた訳です。そして、いくつかのトピック的な体験や、ガイドツアーなどを通じて、江戸東京のレジャー・レクリエーションについて見聞を深めようという企画にした次第です。

なお、今回の地域研究の参加者は29名。平成16年12月3日の午後に行いました。具体的には、六本木ヒルズ（都市レジャーの今）と江戸東京博物館（都市レジャーの昔）をはとバスで移動するという形式をとりました。主催者側では、この地域研究を通じて、いくつかのト

\*独立行政法人森林総合研究所 Forestry and Forest Products Research Institute

ピックを設定していたので、それにしたがって、以下報告を行います。

### 3. トピック1：自然再生とレジャー空間

#### ～六本木ヒルズ～

「都市レジャーの今」を考える舞台として、まずはじめに選んだ場所は六本木ヒルズです。ここは言わずと知れた都市レジャーの中心地です。また、レストラン、ショッピング、美術館などが林立し、下調べ無しに1人で出かけても、迷ってしまうほど多彩で複雑な現代的都市レジャー空間となっています。



写真-1 六本木ヒルズの田んぼ（地域研究は12月に開催されたため、既に収穫後であったが、春から秋にかけては、六本木の真ん中で稲の生長が楽しめる。）



写真-2 毛利庭園（見学者はイヤホンをつけ、プロによる無線ガイドを聞くシステムになっている。この毛利庭園の池には、いわゆる「宇宙メダカ」子孫が放流されている。）

また、近年の環境問題を受けて、六本木ヒルズには、屋上緑化をはじめ、自然との共生の場をつくるための工夫が随所にあります。つまり、現代の都市レジャーでは、単なるアメニティや楽しみの追求だけではなく、環境問題や自然との共生を考えながら、空間づくりを行うことが、欠かせない条件となっています。そのため、六本木ヒルズでは、「自然再生とレジャー空間」に関する見聞を深めることにしました。

具体的には、六本木ヒルズが有料で開催しているウォーキング・ツアーへの参加を通じて、六本木ヒルズ内の自然再生の実態について学習しました。例えば、「六本木の田んぼ」として有名で、かつ個人では見学できない屋上緑化の空間である「けやき坂コンプレックスの屋上庭園（写真-1）」や、江戸時代に長州藩毛利亭の屋敷にあった由緒ある池を保存・再生した「毛利庭園（写真-2）」などを中心に、プロのガイドによる解説のもと見学しました。

ウォーキング・ツアーで自然再生の現場を見学した後には、対照的な事例として、六本木ヒルズ森タワーの49階に上がり、人工的なアメニティ空間である「アカデミーヒルズ 六本木ライブラリー（写真-3）」を見学しました。ここは、通常団体見学には公開されていない会員制の施設です。この企画は、外国人を中心とするタレント事業やマスコミ・文化事業で活躍著しい（株）稲川素子事務所の稲川素子さんによる特別



写真-3 アカデミーヒルズ 六本木ライブラリー（館内は撮影禁止のため、パンフレットを掲載。ゆったりとした人工的技術を駆使したアメニティ空間が広がっている。）



写真-4 「アカデミーヒルズ 六本木ライブラリー」の見学でお世話になった稲川素子さん（写真中央）

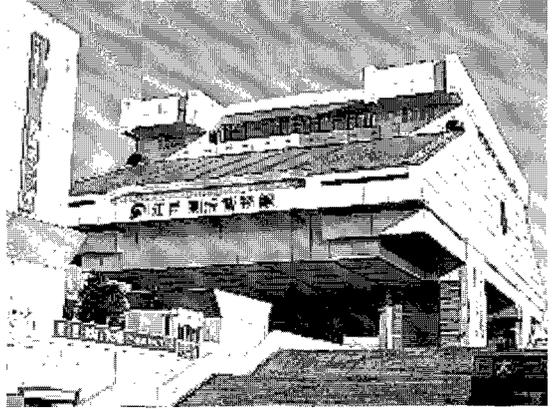


写真-5 江戸東京博物館の全景

の紹介で実現しました（写真-4）。紙面を借りてお礼を申し上げたいと思います。

「アカデミーヒルズ 六本木ライブラリー」は、世界的な建築家である隈研吾氏のデザインによる洗練された空間に、新刊書やビジネス資料などの豊富な図書を取りそろえています。ビジネスマンなどを対象に、都心における知的活動のための環境を、最新の技術を駆使して実現しようとしている一風変わったライブラリーなのです。実際に中に入ってみると、明るく静かな空間が広がっていて、窓際の席に座ると、200mを超える高見から、東京の市街地が俯瞰できます。このような環境を享受しながら、読書や調べものなどの知的活動を行うことができるわけです。このような空間を、コミュニティメンバーになると朝8時から夜11時まで、オフィスメンバーになると24時間365日の利用が可能なのだそうです。館内には、ライブラリーゾーンはもとより、ライブラリーカフェやリラクゼーションルームなどもあり、人工的なアメニティ技術が随所に用意されていて、図書館に居ながらにしてリラックスや気分転換も可能です。また、この図書館は本の貸し出しを行っていないことが非常にユニークです。このライブラリーでは、気に入って持ち帰りたい本は、その場で購入するという、独自のシステムをとっているのです。

#### 4. トピック2：江戸の娯楽とライフスタイル

##### ～江戸東京博物館～

「都市レジャーの昔」を考える舞台として、2 番目

に選んだ場所は江戸東京博物館です。江戸東京博物館は、失われつつある江戸東京の歴史遺産を守るとともに、歴史と文化を振り返ることによって未来の東京を考えるために、平成5年に開設された博物館です（写真-5）。

展示室は、「江戸ゾーン」「東京ゾーン」「通史ゾーン」で構成され、浮世絵や絵巻、着物、古地図など約2,500点、大型模型など約50点あまりが展示されています。そして、江戸時代の武士や町人の暮らしや芝居と遊里、貸本・絵図などの出版文化、江戸の四季と盛り場など、江戸時代の都市のレジャー・レクリエーションを知るために格好の展示が、分かりやすく並べられています。そのため、例えば、大学の授業の一環として、わが国の近世・近代のレジャー史の実習をする場合、江戸東京博物館は非常に適した施設です。

江戸東京博物館では、六本木ヒルズのようなプロによるガイド制をとっておらず、ボランティアガイド制度をとっています。ただし、ボランティアガイドとはいえ、毎年の募集定員をはるかに超える応募があり、それを突破した精鋭の方々が集まっています。そのため、どのボランティアガイドの方も非常に豊富な知識と解説技術を持っています。また、今回は日本語による解説をお願いしましたが、英語はもとより、フランス語、スペイン語、中国語などの外国語によるガイドも可能で、外国の方々に江戸東京の都市文化を伝えるメッセンジャーとしての役割も果たしています。

今回の地域研究では、そのボランティアガイドにお願いし、常設展の入り口付近で、展示内容のブリーフィングを行ってもらい（写真-6）、江戸の娯楽やライフスタイルに関する見聞を深めました。



写真-6 江戸東京博物館のボランティアガイドによる説明（ボランティアガイドの方は、比較的年配の方が多く、豊富な知識と、礼儀正しい語り口が印象に残る。）

例えば常設展の入り口にある日本橋のセットをわたったところに、2双の大きな屏風が展示してあります。一方は武士の目から見た江戸の空間、もう一方には町人の目から見た江戸の空間が描かれています。2つの屏風を比較してみると、江戸時代の武士と町人との娯楽感の違いが明瞭に分かります。描かれている内容がまったく違ったり、たとえ同じものが書いてあってもその大きさが極端に違うことが明確なので、いつまで見ても飽きません。

そのほかにも、江戸時代の貸本システムは、背負子を担いだ貸本屋が、利用者（町人）の家を一軒一軒訪問配達する方法をとっていることなどが展示されました。先程の六本木ヒルズのライブラリーと比較すると、時代を隔てた読書スタイルの変遷が非常に興味深く感じられました。

ボランティアガイドによる解説の後は、流れ解散をして、各自興味のある展示施設を自由見学して頂きました。展示内容そのものが非常に豊富なので、参加者の中には午後8時の閉館間際まで、見学を続けた人もいたとのことでした。

### 5. トピック3：移動に利用した「はとバス」

見学会の交通機関には「はとバス」を利用しました。ちなみに、はとバスの設立は1948年(昭和23年)。その際の趣旨は「内外人ヲ対象トシテ、内ハ国内観光ニ新時代のニシテ快適ナサービスヲ供スル・・・、外ハ国際観光客ニ対シテ本事業ヲ通ジテ、新生平和日本ノ真ノ姿ヲ紹介・・・」と、戦後復興期の意気込みが込め



写真-7 東京駅構内の案内板（「はとバス」だけは独立明示されている。）

られています。それから半世紀。「はとバス」は昭和の都市レジャーを牽引し、現在も新しい東京の姿を国内外の人々に紹介しています。

今回の地域研究では、現実の「はとバス」を利用してもらうこともトピックの1つでした。

例えば、集合場所の最寄り駅、東京駅構内の看板を見ると（写真-7）、他のバスと違い、「はとバス」だけは、個別に道案内が明示されていることが体験できます。また、「はとバス」は東京駅などの大きな駅のロータリーに乗りつけないという事実も、実際に「はとバス」を利用しなければ体験できなかったと思います。今回の現地研究の集合場所が、東京駅前ではなく、駅からから歩いて5分の鍛冶橋駐車場となっていたのもそのような理由からなのです。

当日の乗車時間そのものは、1時間程度だったため、運転手さんやガイドさんとの交流は十分ではなかったともいえますが、体験としての「はとバス」乗車という目的は達成できたと思います。

### 6. おわりに

以上、地域研究の概要を報告しました。次回35回大会は、国際基督教大学(ICU)で開催される予定です。

学際的な研究者が集まるレジャー・レクリエーション学会において、会員間の相互交流を深めるためにも、このような地域研究を継続することは重要だと思います。今回の地域研究には参加できなかった方々も、是非次回の地域研究に参加して、ディスカッションの輪に加わって頂ければ幸いです。